HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	外国人による日本語文法教本の研究 ： W. G. Aston著『日本文語文典』を中心に
著者	中川，かず子
引用	北海学園大学人文論集，23・24：375-397
発行日	2003-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

外国人による日本語文法教本の研究
── W. G. Aston 著『日本文語文典』を中心に ──

中　川　かず子

はじめに

外国人による日本語研究，特に西洋の言語学を規範に日本語を観察しその文法体系を記述するという作業が16～17世紀のキリシタン宣教師により始められたことは周知の通りである。先人のラテン語，日本語研究を継承したJ. ロドリゲスの著『日本大文典』(1604～1607年)，『日本小文典』(1620年）の文法論が近代国語学の成立過程に大きな貢献をしただけでなく，外国語としての日本語研究，ならびに英語話者による日本語学習書(教本）の発展に寄与したこともこれまでに多く語られている。西洋の日本研究者の国語学への貢献については，国語学史研究の一環として多くの研究が既になされている。例えば，松村明(1970，1955，1999ほか)，古田東朔(1972，1974，1978ほか)，安藤正次(1975)，亀田次郎(1973ほか)，杉本つとむ（1977，1989）などは，国語学との関連における西洋人の日本語研究，特に音声や文法について論じてきた。また，Stefan Kaiser（1995年）はこれらの国語学史研究を西洋の研究者の視点による「西洋人による日本語学研究史」と重ねながらこれまでの研究史を英語の論文にまとめている。本稿では，こうした先行研究を基礎として，外国人による日本研究が今日に至る日本語文法学習書の発展に果たした役割を検証していきたい。その方法としては，W. G. Aston の〝A Grammar of the Japanese Written Language″（『日本文語文典』，1872年初版）を取り上げ，同時期に刊行された独創的な文法教本であるS. R. ブラウン著『日本語会話』(〝Colloquial Japanese or Conversational Sentences in English and Japanese″)(注1) と

の比較考察を含め，アストンの言語観と学習書としての役割を見ていくことにする。

ブラウンとアストンについては，ブラウンの方が約10年早く文法解説書付き会話教本を刊行しているので，両者の文法観に多少隔たりがあるのは止むを得ないと思われる。しかし，両者とも，ロドリゲスの『大文典』ほかの日本語関係資料やフランス，オランダの日本研究者達の研究を基礎として，その上に日本人との言語生活の体験から具体的で実用的な日本語の用法を示し，日本語学習書としての目的も果たしている点で共通する部分がある。アストンはさらに日本人による日本人のための国語文法体系についても研究を深め(注2)，多くの研究成果を残しているところから，その後のチェンバレンとの比較も興味深いが，今後段階的に取り上げて検証していくことにする。

西洋人の日本語研究の歴史的変遷とその分類方法について，S. Kaiser (1995)は過去の国語学史研究家達の先行研究を踏まえて次のように分類している（原文は英語，日本語訳と下線は筆者による）：

1　ラテン語文法の応用

1.1　ポルトガル人の伝統（1549年～）

1.2　オランダ，フランスの伝統とその先駆者（1792～）

2　周辺国との接触：ロシアの伝統

2.1　漂流民と日本語学習（1702～）

3　<u>ラテン語から日本語文法へ：英米の伝統（宣教師と外交官）</u>

3.1　初期の研究（W. H. メドハーストほか，1830年～）

3.2　国学（国文学）の伝統の発見（アストンほか，1870年～）

4　初期の研究の統合 ── 国際的な伝統の黎明

── チェンバレン以後1880年～

Kaiserは，ブラウンとアストンをともに「ラテン語から日本語文法の時代の転換期」に位置付けている。そして，その中でブラウンは「英米人による日本研究の草創期」に，アストンは「国学の伝統の発見」に分類されている。しかし，両者に共通しているのは，ともに英米系で西洋言語学の

規範に照らした日本語の文法体系を分かりやすい学習書にまとめた点であろう。アストンについては，国文法の研究を合わせた日本語研究のほか，日本書紀（翻訳），日本文学史（英語），朝鮮（韓国）語研究等の著作もあり，「日本語学」だけでなく「日本学」研究者としての高い評価を得ている。

『日本文語文典』（図１）── 学習書としての意義

アストンの『日本文語文典』（以下『文語文典』と略す。英文書名：〝A Grammar of the Japanese Written Language〟，図１参照）は，1872 年初版，1877 年に第二版，1904 年に第三版が刊行されている。アストンは『文語文典』初版刊行の前年に口語文典（〝A Short Grammar of the Japanese Spoken Language〟）も出版し，第四版の〝A Grammar of the Japanese Spoken Language〟（1888 年）まで版を重ねている。話し言葉と書き言葉との区別を行ない，両者についてまとまった別々の文法書を著したのはアストンに始まると言われる(注3)が，その中から本稿では初期の日本語学習書としての視点から『文語文典』初版について見ていくことにする。

1　全体の構成

『文語文典』は序文，目次，本文，国文法に関する論文一覧，索引，それに異なる種類の日本語文章のサンプルという構成で，約 120 頁にまとめられている。序文と巻末の研究資料一覧が示す通り，本書はこれまでの主要な国文法研究の成果を踏まえた上に成り立っていることがわかる。序文にはこの資料一覧が大英博物館図書室に所蔵されていること，また，E. サトウの恩師でもあったロンドン大学キングスカレッジの中国語研究者，サマーズ（Prof. Summers）教授の協力に対する謝辞も含まれている。

目次（図２）の概要は以下の通り ──

第１章：日本語の文字の種類，漢字の日本語における意義と用法，カナ文字の由来と一覧表(巻末資料参照)，発音，アクセント，音変化等につい

A

GRAMMAR

OF THE

JAPANESE WRITTEN LANGUAGE,

WITH A

SHORT CHRESTOMATHY,

BY

W. G. ASTON, M. A.

INTERPRETER AND TRANSLATOR TO H.B.M'S. LEGATION, YEDO, JAPAN.

LONDON:

PRINTED FOR THE AUTHOR, AT THE OFFICE OF THE "PHŒNIX,"
3, GEORGE YARD, LOMBARD STREET.

1872.

図1

CONTENTS.

Introductory Remarks - - - -	page	I to IV
CHAP. I. Writing, *Shindaiji*, *Kana* and *Mana*, *Katakana*, *Hiragana*, Pronunciation, Accent, Letter-changes, the *Nigori*.	„	1 to 16
CHAP. II. Classification of words - - -	„	17
CHAP. III. Uninflected Principal words. Noun, Pronoun, Numeral, Adjective, Adverb, Interjection - - - -	„	18 to 28
CHAP. IV. Inflected Principal words, Office of Inflection, Table of Inflections, Principal parts of Verb, Conjugations, Irregular Verbs, Conjugation of Adjectives, Derivative Verbs, (Transitive, Intransitive, Causative, and Passive Verbs), Compound Verbs, Derivative Adjectives, Compound Adjectives - -	„	29 to 44
CHAP. V. Uninflected Teniwoha suffixed to Nouns	„	45 to 56
CHAP. VI. Uninflected Teniwoha added to Verbs and Adjectives - - -	„	57 to 63
CHAP. VII. Inflected Teniwoha - -	„	64 to 71
CHAP. VIII. Auxiliary Verbs - - -	„	72 to 75
CHAP. IX. Syntax, Order of Words in a Sentence, *Kakari teniwoha*, *Kenyōgen* -	„	76 to 79
Chrestomathy - - -	„	80 to 111
List of Japanese treatises on Grammar	„	113 to 115
Index of Japanese words - -	„	117 to 119

図2

て／第2章：品詞分類／第3章：「無活用」語(名詞，代名詞等)について／第4章：「活用」語（動詞，形容詞を中心として)／第5章：無活用のテニヲハ(名詞に接続するもの)／第6章：無活用のテニヲハ(動詞，形容詞に接続するもの)／第7章：活用語テニヲハ／第8章：助動詞／第9章：文体，語順，係助詞等／巻末資料：諸家名文集（異なる文体の紹介と翻訳，語法説明)，国文法関連論文一覧，日本語索引

以上のような，文字体系と音声の概説，文法体系の項目別説明といった全体構成を見ると，ロドリゲスの『大文典』およびブラウンの『日本語会話』と同様，日本語を学ぶ初学者向けの学習書としての役割が大きいと言える。外国人に対する日本語教育において目的が何であれ初級学習者に対する重要学習項目の筆頭は「文法」と「音声」である。時代が変わっても，目的が多少異なっても，認知的な言語理解を促すために学習者の母語との比較的視点も交えて学習言語の体系を把握することは重要であり，特に文化的ほかの理由からそうした学習方法を必要とする学習者も多い。アスト

ンはほかの外国人研究者と同様に，日本に滞在する自身の必要性のため，さらによい日本語学習書を外国人学習者に提供しようと学習書の刊行に至ったのであろう。異言語に対する高い知的関心と旺盛な研究意欲を有していたために，完成された学習書がその本来の目的よりも国語学研究資料としてこれまでに国内外の研究者の関心を集めてきたのは興味深いことである。

2 『文語文典』に見る日本語の音声と文字（第１章より）

第１章の前半で著者は漢字伝来以前の文字の歴史について触れている。実際の日本語学習には関係がないとしながらも，神代文字の存在の真偽について関心を示した内容が見られる。

次に，巻末の文体サンプルの番号を示し，楷書，行書，草書について簡単に説明し，書き方として上段から下段へ右列から左列へという順序も示している。

ブラウンの会話教本には音声と文法の用法説明はあるが，文字に関する記述は数行程度と文字一覧表があるにすぎない。ブラウンの協力で辞書『和英語林集成』を編纂したヘボンは文法よりもローマ字綴りや日本語の語彙，文字に関心があったようである。ヘボンの同辞書の序文には仮名文字や漢字の役割についての歴史的な背景と日本語文における使い方が説明されている。一方，アストンは文法だけでなく日本語の体系全体に関心が向けられている。この章では，漢字の働きについて，それほど長くはないが，具体的な特徴を述べながら中国語の意味と音声が日本語の漢字にどのように表わされるかを示している。また，仮名文字についても，その歴史的な変遷と由来を述べ，それらの用法を５点に分けて挙げている。今日の日本語教育においても参考になるところがあるので簡単に触れておく：①真名は漢字由来のナ（名），コトバ（詞）に用いられる，②カタカナ，あるいはひらがなは助辞（テニヲハ(注4)）に用いられる，③カタカナ，あるいはひらがなは漢字音の読みを表わすのにその右側に書くことがある（巻末資料の名文集サンプルⅤ），④カタカナは公的な文書など（サンプルⅥ）で用いられ，

ひらがなは物語や手紙文などの草書体の中で用いられる(サンプルⅢ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅶ)，⑤カタカナはひらがな文中，感嘆詞や外来語の表記に用いられる。英語文の中で，イタリック体を用いるように。

その他，文字に関連して，仮名音節表の「いろは」順と「あいうえお」順に触れ，それぞれの表を示している(いろは表は巻末資料に)。また，ヤ行，ワ行，ハ行の文字綴りと音声の不規則性，文字記号の決まり（濁点，句点，反復，引き音等）についても説明を加えている。

最後の5頁は発音，アクセント，音声の短縮形，連濁(にごり)，促音化，撥音化，母音交替ほか，日本語音声の特徴を説明している。英語系日本語研究者のメドハースト，ブラウン，ヘボンは，いずれも日本語音声に関する説明が丁寧で具体的である。ブラウンの『日本語会話』の「音声とローマ字」では多くの部分が英語音との対照で見る日本語の母音，英語系学習者に難解な発音（ガ行鼻濁音，ス，ツ，ヒ，など)，母音の無声化，促音，アクセント等が項目として取り上げられている。メドハーストと同じ傾向であり，英語系学習者に理解しやすいような工夫が見られる。ロドリゲス『大文典』においても外国人から観察し分析した日本語音声が示されたが，これら英米系の研究者と同様に，アストンもまた西洋人による日本語音声研究の伝統を受け継いだ。さらに，アストンと同時期の日本研究者であったE. M. サトウ，B. H. チェンバレンと研究が繋がっていき，その言語観や研究方法が現代の日本語研究者や日本語教師に受け継がれている。

3　『文語文典』の文法 ── 日本語と日本語教育研究の視点から

第2章で日本語の品詞分類についての説明がある。始めに，国学者達による品詞分類の研究成果として，①名（ナ）②詞（コトバ）③辞（テニヲハ）の三種を挙げている。アストンの説明では「名」は西欧語でいう名詞，代名詞，数詞（Numeral Adjective）で，「詞」は動詞，形容詞，「辞」は付属語（助詞など）にあたるとしている。この三種の分類法が19世紀半ば前後の国内における文法観の主流をなしていたと考えられる(注5)。アストンは本文および巻末の国文法論文一覧に挙げた『詞の捷径』(1845年，Kotoba

no chikamichi，鈴木重胤）を有用な日本語文法書であると高く評価している。同書，あるいはその流れを汲む文法書を参考に，アストンはさらに「活用」の有無と主要語（principal words）か付属語（subordinate words）かの二つの観点で次の4種の分類も挙げている：

（Ⅰ）活用しない主要語（名詞，代名詞等＝名）

（Ⅱ）活用する主要語（動詞，形容詞等＝詞）

（Ⅲ）活用しない付属語（助詞，接辞等＝テニヲハ）

（Ⅳ）活用する付属語（助動詞類＝テニヲハ）

アストンは『詞の捷径』から「名」を〝i-koboba〟で静止した状態のことばとし，その逆の意味となる〝hataraki-koboba〟をそれまでの学者の捉える「詞」であると説明した(注6)。

以上のアストンによる品詞分類の理解は，ブラウンのそれとは大きく異なる。つまり，ブラウンは，「名詞」「動詞」「人称および疑問代名詞」「形容詞」「副詞」「接続詞」「後置詞」「間投詞」「助辞」というように，西洋文法の概念で日本語を分類している。その中で個々の文法項目について日本語の具体的な用例を挙げながらその形態的，意味的特徴を詳しく述べている。しかし，西洋言語学の文法用語が多く使われているため，学習書としては一般の学習者にとって難解な部分が少なくない。アストンの分類の個々の例は後述するが，西洋人の文法研究史において国学への積極的評価とその融合に努めたアストンの功績は大きいと言える(注7)。また，学習書として見た場合，「活用語」と「無活用語」，「主要語」と「付属語」の分類法は外国人研究者を含むそれまでの研究成果を継いだものとはいえ，外から日本語を理解する上でわかりやすい。のちに，語分類で「自用語」と「副用語」（山田孝雄），「主用語」と「副用語」／「一次品詞」と「二次品詞」（安田喜代門），「独立語（活用／無活用）」と「付属語（活用／無活用）」（橋本進吉）といった語分類がなされていくが，アストンの示したウチ（国学文献研究）とソト（外国語としての言語研究）からの日本語観の影響も少なくないと思われる。

3.1　活用しない主要語について

説明によると，この語分類に含まれるのは，西洋文法でいう「名詞」，「代名詞」，「数詞」である。漢語，和語ともに含まれ，後続の助詞「の」「に」の付く和語や動詞「なる／する」の付く漢語を例に挙げ，この語グループを識別する方法を説いている。項目として，①名詞，②複合名詞，③混種語，④尊敬の接頭辞，⑤性，⑥代名詞，⑦人称代名詞，⑧疑問代名詞，⑨不定代名詞，⑩関係代名詞，⑪数詞，⑫助数詞，の12種を取り上げ，それぞれに解説している。これらのうち，⑤から⑩までがブラウンと共通する西洋的文法の枠組みであり，①～④と⑪，⑫については日本語文法の概念と対応する。これらについて，個々に見ていくことにする。

a）名詞（The Noun）── アストンは名詞を単純名詞（simple nouns），派生名詞（derived nouns），複合名詞（compound nouns）に分けるが，語の表面だけからは区別ができないと述べている。派生名詞の例として，形容詞の語幹に「さ」「み」「け」「ら」などが付いたもの：「高さ」「重さ」「何げ」「高み」「深み」「賢しら」「侘しら」などの意味と形態を示している。これは，外国人学習者の中級段階の語彙理解において必修の学習項目の一つであり，既にロドリゲス『大文典』によっても取り上げられ，具体的な用例とともに解説されている(注8)。ブラウン，アストンともに内容と項目の数は異なるものの，ロドリゲスと基本的に同じ考えを継いでいる(注9)。

b）複合名詞 ──『大文典』に比べると簡潔なまとめかたになっている。アストンは複合名詞を形態的に次の5種に分類した：①二組の名詞をつなぐ（風車／川端），②形容詞語幹と名詞（赤ん坊／白金），③名詞と形容詞語幹（とも太／割高），④動詞の語幹と名詞（乗り物／着物），⑤名詞と動詞の語幹（もの知り／水入れ）── このように分類の方法をまとめている。

c）混種語 ── 外来語（漢語）と日本語の組み合わせによる「混種語」は多いと述べ，「重箱」「覚え帳」「破裂玉」「状袋」（封筒）などの例を挙げ，日本語の語彙の特徴の一つとしている。

d）尊敬接頭辞 ── 複合語と一種として，尊敬の接頭辞「御（お／おん／み）の付した名詞を挙げ次のように説明している：「お」は文章語にあまり用いられない。一般に，固有語に用いられるが，「お留守／お役所／お宅／お食事」などの例外もある。「おん」は書簡体に，「み」は「みこ（皇子／皇女）」「みす（御簾）」「みこと（尊）」など，神あるいは皇室（みかど）関連の固有語に用いる，とある。また，漢語に付す尊敬の接頭辞「御」「貴」「尊」などにも触れている。

e）性（gender）── 男性名詞，女性名詞の区別として日本語に「オ／オン」（男性），「メ／メン」（女性）を説明する。「性」もまた西洋文法の範疇の一つであり，ブラウンの文法書にも名詞の項で数行の説明がある。

f）繰返し語（畳語）── 語の繰返しにより複数の意味を表わし，音声的には後の語の最初の文字に「濁り」が生ずるとある：（例）国々／ところどころ／時々／たびたび／品々／など。

g）代名詞ほか（人称代名詞，指示代名詞，疑問代名詞，不定代名詞，関係代名詞を含む）── 日本語では「代名詞」と「指示代名詞」の範囲で分類が十分であろうが，アストンは西欧人の観点からか代名詞に関してはかなり細分化している。日本語では一般に人称代名詞の使用が制限され，強調する場合に用いられるとした上で，一人称，二人称，三人称の代名詞について説明している：一人称 ── 吾（われ，わが），私，僕，某，朕，臣，愚，予，拙者……。二人称 ── 汝，君，貴，貴君，貴公。三人称 ── あれ，彼，彼ら，お方（あの人）で，「かれ，かの」は当時の口語では用いないとある。次に，指示代名詞について，「コ」は一人称に用い，話し手に近いか関係のあること，「ソ」は二人称に用い，聞き手に近いか関係のあることに言及すると述べている。また，「それ，その」は直前の談話の内容を指示するとも述べ，この「談話文脈指示」用法説明はブラウンの学習書には見られなく，アストンにより新たに加えられている。指示代名詞と人称との関係で言うと，現代では聞き手側（二人称）と三人称に関係することがらで談話の中

での使用頻度が高い。日本語学習者にとって誤用の起きやすい「厄介な」学習項目である。ブラウンが「その他の代名詞」の中で「こそあど」を説明したのに対して，アストンの「指示代名詞」(Demonstrative Pronouns) として独立した項目をたてた点は注目される。

その他，「不定代名詞」(「人の噂も75日／某は～」)，「再帰代名詞」(自ら，自身，自分などの例)，「関係代名詞」(「来る（ところの）人」を例に）についての短い説明が付されている。

h）数詞／助数詞 —— ブラウンと同様に，アストンは固有語と漢語の数詞を1から10000まで示し，読み方と意味を簡単に説明している。助数詞について，ブラウンは〝Numerative Auxiliaries〟，アストンは〝Auxiliary Numerals〟と呼び方は異なるが，内容に大きな違いはない。アストンよりもブラウンの方が助数詞の例を多く示している。

3.2　活用する主要語（「詞」／働き詞）について

『文語文典』の第4章では「活用する主要語」として動詞と形容詞が取り上げられている。始めに，日本語の動詞の活用は，西洋語のように，ボイス（態），ムード（法），テンス（時制），人称，性，数，格といった概念と関係をもたない，と述べている：「受身態」がない代わりに，動詞の変化形で「受身」を表わし，法や時制はテニヲハや接辞で表わす。人称についても，直接の語で示すよりも，尊敬語，謙譲語の使用で間接的に表わすようにする。性は接辞で，数，格は名詞の変化なしに接辞や助詞をつけて表す —— このように，第4章の冒頭で西洋言語学から見た日本語文法の特徴を概説している。

次に，動詞の活用表があり，横軸に「規則活用」の動詞と「不規則活用」の動詞の項が並び，縦軸に活用段の名称が書いてある。アストンの文法論，特に動詞論については古田東朔（1978ほか）に先行研究があるのでここでは詳述しないが，アストンは動詞の活用の規則性を基準に次の2通りに分類している：

I）規則動詞（Regular Verb）—— 四段／上一段／上二段，下二段動詞

II）不規則動詞（Irregular Verb）── アリ（ラ変）／キ（カ変）／シ（サ変）／イニ（ナ変）

アストンの動詞分類の特徴は，変格活用の動詞をすべてまとめて「不規則活用」動詞としたところである。のちに『口語文典』や『文語文典』の改訂につれ現代的な変化が見られるが，基本的には四段と一，二段動詞を規則動詞とし，変格活用動詞をまとめて不規則動詞とした分類法になっている。規則動詞 I II（五段活用および一段活用）と不規則動詞（カ変とサ変）の二種類，3グループに分ける現在の日本語教育の動詞の活用内容と方法を考える時，アストンの分類法とのつながりを看過できない。一方，ブラウンも日本語の文法の中で動詞について多く調べているが，彼の分類では，動詞の語根がI，Eのものは「規則動詞」，語根の直前がI，A，Oのものは「不規則動詞」となっている。つまり，前者は「上一段と下一段／上二段と下二段」動詞，後者は「四段」動詞が中心で，変格活用の動詞もそれぞれに入っている。アストンもブラウンも語根のI，Eを基準にしているところは共通するが，大きく異なるのは「四段活用」を規則動詞とするか不規則動詞とするかという点である。

次に，動詞の活用段の名称について，アストンは前述の『詞の捷径』から，将然言（future form），続用言（あるいは連用言），絶定言（あるいは裁断言），続体言，既然言（past or perfect form）を挙げ，それぞれの意味と用法を具体的に説明している。例えば，「続用言」（〝Root or Adverb〟という英語訳がついている）の活用形は，動詞や形容詞の語根が名詞にも副詞にもなり得ると述べ，「喜び」「回り」は名詞となり，「近く走り来る」の「近く」も「走り」も副詞であると説明する。英語訳がそのような意味を表している。また，絶定言（conclusive form）は文末の終止形となる，時制には関係がないが多くの場合に現在形となると述べ，次の例文を挙げている：「のちの人の定めを待つ」「このテニヲハにふた心あり」「この働き詞，いと多し」── これらの例文の後に，口語文では絶定言止めはもはや使われなく，「ます」で文を終えるのが一般的であるという補足説明が加えられている。「続体言」（Attributive or Substantive form）の説明では，名

詞に接続する語形で，関係節の中の動詞がその形になり，形容詞と同じように名詞を修飾する，また，名詞の役割として，「この字を用うるは誤りなり」という文を挙げ，「～(の／こと）は――だ」の「の」「こと」が略された形で名詞の働きであると説明している。さらに，時制については，続体言も絶定言と同様，時制と関係がなく文脈により現在，過去，未来の時制が決定される，と説明する。時制に関連して，アストンは日本語の「完了と時制」についても触れている。日本語の文法では動詞の語根に「ある」をつけて「完了形」とし，動作が完了したことを示すもので，完了した「時」については何も手がかりがつかめないと述べ，時制に関する日本と欧米の文法観の違いを意識づけている。

ところで，ブラウンの動詞活用の規則性の基準がアストンと異なることは上で述べたが，活用段の捉え方も全く異なる方法をとる。ブラウンの活用論は，ロドリゲス～ホフマンの文法論と同一ではないが，基本的にはかなり近い傾向にある。ブラウンは規則動詞と不規則動詞に分類した上で，命令形（Imperative form)，名詞修飾形（Attributive form)，動詞修飾形(Gerundives)，接続形(Conjugation form)，条件形(Conditional form)，譲歩形(Concessive form)，肯定過去形，過去進行形，未完了形，希求形，受身形，否定形（否定動詞，否定命令，否定未来，否定動詞修飾，否定条件）というように，ラテン語文法のほか，西洋言語学における態，法，時制，アスペクト等の視点を交えた日本語文法を説いている。ブラウンは言語学者としても知られているが，言語学の分類や専門用語が日本語文法に必ずしも対応しない上，英語系学習者にとっても解釈が容易でないという問題は残る。

3.3　動詞の派生語について

この節では，自動詞，他動詞の分類法について説明されている。日本語教育においても，自他動詞の用法と分類法の習得は必要と考えられ，教授法の工夫も求められるところである。

まず，名詞からの派生動詞として，漢語に「スル」を加えた動詞「生ず

る／応ずる」の例を挙げている。次に，動詞からの派生動詞として，自動詞（Intransitive verb）と他動詞（Transitive verb）の説明がある：英語の自他動詞は，同じ動詞が文脈により使い分けがなされるのに対し，日本語では同じ語根をもちながら語尾変化により自他動詞に分かれる。自動詞と受身動詞とは区別されるべきである（例：「切れる」と「切られる」）。自動詞はむしろ英語の〝-able〟や〝-ible〟（可能の意）で終わる語に意味的には近い ── このように述べ，自動詞のもつ「自発的」な意味合いを指摘している。

アストンによる自他動詞の分類（『文語文典』に一覧表，pp.38～42）は，ロドリゲスの「能動動詞」「受動動詞」「中性動詞」「共通動詞」という動詞分類から，具体的な派生方法の解説（『大文典』，土井忠生訳，pp.268～284）のほか，ホフマンやブラウンの動詞論などを参考にしてつくられたと思われる。『日本語文法大辞典』（明治書院，1969／2002）の巻末資料「日本語文法研究史」で「自動詞」「他動詞」の用語が見られるのは，チェンバレンの『日本小文典』（1887 年，明治 20 年）が最初であるが，この「自動詞」「他動詞」という用語を用いたホフマンとその二極の概念をより明確に整理して示したのがアストンであり，そこからチェンバレンへと引き継がれたものと考えるのが妥当であろう。

その他，形容詞からの派生動詞の例が次のように示される：①白き―白む／黒き―黒む，②重き―重んずる／甘き―甘んずる，③繁き―繁る／苦き―苦る，④行きたき―行きたがる／ほしき―ほしがる／怪しき―怪しがる，など。また，「複合動詞」「派生形容詞」「複合形容詞」の内容は次の通り：複合動詞の例として，①目的語との組み合わせ（思い捨てる／天下る）②動詞を修飾（煮殺す／せめ入る／ぶち殺す）③同類の意味の組み合わせ（行き帰る／逃げ散る）など，派生形容詞の例として，「子供らしき」「忙しき」など「らしき」「しき」を付したもの，複合形容詞として，「名高き」「手ばやき」「聞き苦しき」「逃れがたき」等が示されている。

3.4　活用しないテニヲハ（名詞に接続）

始めに，テニヲハは格の指標として用いられるとした上で，次の5種類を挙げている：①所有格（Genitive　case）── の，が，（つ，づ）②与格（Dative case）／所格（Locative case）／助格（Instrumental case）── に，にて，③対格（Accusative case）── を，④呼格（Vocative case）── よ，や，⑤奪格（Ablative case）── より，から ── これらの格助詞の用例と意味を示した後，「は，か，や，ぞ，こそ，も，と」などの他の助詞を挙げている。この中の「ハ」についてアストンは『言霊のしるべ』（黒沢翁満，1852）を参考に次のように述べている：「ハはある事柄を文のほかの要素から切り離すのに用いられるだけでなく，対比的な役割をも有する。英語の〝in respect to〟ほか，フランス語，ギリシャ語に近い意味の語がある。」

テニヲハの説明は45頁から56頁に含まれるが，アストンは格助詞とその他の助詞に分け，前者には西洋文法で，後者には日本語の文法論を基準にして説明を行なった。そのためか，全体的にいくぶん不統一の印象は免れない。「その他の助詞」には具体的な用例が多く示されている。

3.5　活用しないテニヲハ（動詞，形容詞に接続）

57頁から63頁までは，動詞や形容詞に接続する助詞の用法と意味が次のように示されている：

①動詞の語根に接続する助詞（に／は／も／と／ながら／つつ）

（例）「呼びニ来れり」「花の色は移りニけり」「居ナガラ敵を待つ」

②終止形（絶定言）に接続する助詞（と／や）

（例）「行くト言っても」「悲しヤ ──」

③連体形（続体言）に接続する助詞（な／に）

（例）「食べるナ」「見るナ」「～とするニ」

④否定語根（将然言）に接続する助詞（ば／で／じ）

（例）「行かバ」「知らずバ」「～を知らデ」「これに過ぐるはあらジ」

⑤完了形（既然言）に接続する助詞（ば／ど／ども）

（例）「春立てバ」「行けド」「呼べドモ」

3.6　活用するテニヲハ（助動詞）

この節では，古典文法の助動詞を前節と同様の方法で分類している：

①語根に接続するもの（つ，たり，ぬ，けり，し，たし，まほし）

②終止形（絶定言）に接続するもの（なり／めり／べし／まじ）

③連体形（続体言）に接続するテニヲハはない。

④否定語根（将然言）に接続するもの（ず，む（ん），まし）

⑤完了形（既然言）に接続するもの（り）

活用語テニヲハについても，前節の「助詞」と同じ分類法にしている。この節で挙げられた助動詞はすべて古語であり，現代ではその多くが使われないが，当時の文献資料の用例とともに説明されているので，中級以上の学習書あるいは教師の参考書として役立つと思われる。

以上見てきたように，アストンはテニヲハについて，格助詞の部分以外は日本語の文献等に基づく理論を展開している。一方，ブラウンは，〝post-position〟（後置詞）と〝Noun〟（名詞）の項目のところで，postposition という用語を用いて会話文から用例を引き出しながら用法を説明している。活用語テニヲハは動詞や形容詞の語尾変化の中で捉え，特に独立した項目にはなっていない。

3.7　助動詞（Auxiliary Verb）

アストンは尊敬／謙譲の助動詞を中心にこの項で取り上げている：①一人称が用いる謙譲の助動詞（はべる，さぶ（む）らう，まかる，申す，あぐる，たてまつる）②二人称が用いる尊敬の助動詞（まする，あそばす，なさるる，くださる）③その他の助動詞（ある，なる，なり，に，なん）

『文語文典』には尊敬語，謙譲語について「代名詞」の項で比較的詳しい説明がある。後に刊行されたアストンの『口語文典』第四版（〝A Grammar of the Japanese Spoken Language〟，1888 年）には尊敬／謙譲の表現と語彙の項が独立して置かれている(注10)。ブラウン，アストン，E. サトウ，チェンバレンのいずれも話し言葉の中の敬語に関心をもち研究を行なったのは興味深い。

おわりに

これまでアストンの『文語文典』初版の内容を日本語研究と日本語学習書の観点から眺めてきた。明治期に刊行された一連の外国人研究者による日本語学習書の中で，本稿では特にアストンの文法書を通して当時の文法観と日本語文法の学習法を確認することが目的であった。アストンの名前は国語学史の中にもたびたび表れるが，歴史，文学，言語の分野でこれだけ多くの日本研究業績を残しているにもかかわらず，同じ英国人の日本研究者 B. H. チェンバレンの日本語研究の方が国内では語り継がれてきた。なぜか，アストンによる日本語研究の具体的内容が国内では多く伝えられていない。そこで，今日の日本語教育に対してどれだけの貢献を果たしたかを確認する意味でも，改めて今日の文法研究と文法教育に新しい流れをつくった明治期前期の文法書を読み直すことにしたのである。

本稿で取り上げたのは，序文，第1章の「文字，音声」，第2章から第8章までの文法各論である。最後の「文体 syntax」については全体の特徴と合わせてここで簡単にまとめたいと思う。

『文語文典』終章でアストンが英語との対照で論じた日本語文の語順と構文の要点は以下の通りである：形容詞，副詞の語順，名詞と助詞の位置関係，動詞が文末に置かれること，述語が英語の copula(繋辞／be 動詞など)に相当する「～ダ（デアル)」の前になること，時間の幅を示す表現が先に出てくること，従属節が主節よりも前に表れることなど――

このような英語話者から見た日本語観は，『文語文典』全体に共通して見られる特徴である。アストンのような外国人研究者による日本語研究は日本の外の言語や文化から観察し研究した日本語論に基づくと同時に，自らの経験的学習から培われた日本語習得法への自信にも裏打ちされている。日頃から無意識に日本語を用いている日本語母語話者には気づかないさまざまな日本語運用上の問題や特徴が外国人研究者，あるいは学習者によってこれまで数多く指摘されてきた。その指摘は的確で，しかも問題解決の方法が論理的であり，大いに学ぶところがある。アストンは英語系の学習

者であり，研究者でもあった。前にも述べたが，アストンの研究成果は今日の日本語教育における教科書や文法書の発展の中であまり語られることはないが，アストンを含めた外国人研究者への積極的評価なくして今日の日本語文法学習書の存在と発展は考えにくいと言わなければならない。

＊『文語文典』著者 William George Aston（1841－1911）は英国北アイルランド，ロンドンデリー生まれ。アイルランドクウィーンズ大学修士課程修了後英国公使館日本語通訳生として来日し，1889 年まで東京在英国公使館書記官として勤務。1984 年～86 年まで京城（ソウル）総領事として京城に赴任。英国に帰国してからも生涯日本研究を続けた。文学博士。主な著書：『日本口語文典』（1871 年初版），『日本文語文典』（1872 年初版），『日本書記』英訳（1896 年），『日本古代史』（1896 年），『日本文学史』（1899 年），『神道』（1905 年）など。

注　釈

（注 1）S. R. ブラウンの『日本語会話』教本の書名は次の通り：〝Colloquial Japanese or Conversational Sentences in English and Japanese, together with An English-Japanese Index to serve as A Vocabulary, and An Introduction on the Grammatical Structure of the Language.〟（1863 年，上海 Presbyterian Mission Press 初版）本稿中，『日本語会話』または〝Colloquial Japanese〟と略して称することがある。

（注 2）アストンは『文語文典』の巻末（初版，p.113-p.115）に，国学資料（論文等）一覧として 25 項目の国学文献を掲げ，それぞれに 2 ～ 3 行ずつの論評を加えている。

（注 3）古田東朔（1978）論文で述べられている（p.43-p.45）。

（注 4）いわゆるテニヲハについて，アストンは無活用（助詞）と活用（助動詞）の両方を含める立場と理解される。

（注 5）これら三種の分類は，『詞の玉橋』（富樫広蔭，1826 年）の，①言（コト＝体言）②詞（コトバ＝動詞，形容詞）③辞（テニヲハ＝助詞，助動詞）という説が基本になって，のちにアストンが参考にしたとする『詞の捷径』（鈴木重胤，1845 年）に引き継がれている。

（注 6）『詞の捷径』以前の三種説（上述）が基になっている。

(注7) 古田東朔は『国語と国文学』(1978年，東大国語国文学会編) の中で，「日本語法研究史において「日本の古典の文献究明」を行なったアストンの研究姿勢」に対し高い評価を示している。

(注8) 土井忠生訳『日本大文典』(三省堂書店，1955年，p.236-p.241)

(注9) S. R. ブラウン (『日本語会話』文法解説部分，p.40) に，形容詞の用法の一つとして，接辞「サ」「ミ」などとの結合により抽象名詞がつくられるとし，その用例が詳しく述べられている。

(注10) 古田東朔「アストンの敬語研究」(1974年，『国語学』) に詳しい。

資料説明

○『文語文典』初版にある仮名一覧表 (TABLE I とある。)

○諸家名文集 (Chrestomathy) ── 文章サンプルとして巻末に表す

(I) 天磐座押放天 (中臣祓) ── 祓詞とその綴り，意味 (翻訳)

(II) 夜久毛多都 ── 仮名文字の使用以前に書かれた詩。音読みで綴られている。読みと訳

(III) 竹取物語の一部，ローマ字と訳，語彙や語法の説明 (Notes)

(IV) 本居宣長『玉のあられ』(1712年) より。語法の説明

(V) 滝沢馬琴『里見八犬伝』(1834年) より。翻訳と語法説明

(VI)「公的文書」規則 (外国人居留地規則付録より)。ローマ字，訳，語法説明

(VII) 手紙文 ── 英国領事に宛てたややかたい丁寧な文体，本文ローマ字文，翻訳，語法説明

参考文献

○Stefan Kaiser (1995) "Pre-twentieth-century western studies of the Japanese language", The Western rediscovery of the Japanese language, vol.1, Curzon Press, England

○S. R. Brown (1868) "Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and dialogues in English and Japanese", The Western rediscovery of the Japanese language, vol.2, 1995, Curzon Press, England

○W. G. Aston (1872) "A Grammar of the Japanese written Language with a short Chrestomathy, (同上の復刻文献 vol.4 所収)

○J. ロドリゲス原著 (1604) 土井忠生訳注，『日本大文典』，1955年，三省堂

○J. ロドリゲス原著（1620）福島邦道編，『日本小文典』，1989 年，笠間書院
○福島邦道（1973）『キリシタン資料と国語研究』，笠間書院
○土井忠生（1942）『吉利支丹語学の研究』，靖文社
○上田万年ほか（1984）『国語学史』，教育出版
○安藤正次（1975）「国語学上における欧米人の貢献」『安藤正次著作集 Vol.7，言語論考』，雄山閣
（1975）「欧米人の日本語研究について」，同上
○亀田次郎（1973）『西洋人の日本語研究』亀田次郎遺稿集（雨宮尚治編），風間書房
○古田東朔（1978）「アストンの日本文法研究」『国語と国文学』55 号，東京大学国語国文学会
（1974）「アストンの敬語研究」『国語学』96 号，国語学会
（1968）「江戸時代までの文法観」『講座日本語の文法 1 』，明治書院
○杉本つとむ（1977）『近代日本語の新研究』，桜楓社
（1989）『西洋人の日本語発見』，創拓社
○松村明（1970）『洋学資料と近代日本語の研究』，東京堂出版
（1999）『近代の日本語論考』，東京堂出版
（1955／1999）『江戸語東京語の研究』，東京堂出版
○日野資純（1968）「西洋近代言語学と文法」『講座日本語の文法 1 』，明治書院
○春日和男（1968）「明治以後の文法論」，上掲書，明治書院
○山東功（2002）『明治前期日本文典の研究』，和泉書院
○中川かず子（2000）「明治期における日本語教本の研究(1)── S. R. Brown の〝Colloquial Japanese〟と日本語教育における意義」，北海学園大学人文論集第 15 号

TABLE I.

i	㋑ 伊	い 以	以	伊 伊		
ro	㋺ 呂	ろ 呂	呂	路 路		
ha	㋩ 半	は 波	者	八 八	盤	半 半
ni	㋥ 仁	に 仁	耳	示 示	示	丹 丹
ho	㋭ 保	ほ 保	保	本 本	本	
he	㋬ 皿	へ 皿	遍	弊 弊		
to	㋣ 止	と 止	登			
chi	㋟ 知	ち 知	遲			
ri	㋚ 利	り 利	利	里 里	李 李	離 離
nu	㋌ 奴	ぬ 奴	怒			

TABLE I.

ru	㋩ 流	る 留	流	類 類	累 累	
wo	㋲ 乎	を 遠	遠	乎 乎	越 越	
wa	㋮ 和	わ 和	王			
ka	㋕ 加	か 加	可	可		
yo	㋤ 與	よ 與				
ta	㋟ 多	た 太	多	堂	堂	
re	㋹ 礼	れ 礼	連	麗		
so	㋷ 曾	そ 曾	曾	楚	所	
tsu	㋠ 閇	つ 閇	都	津	徒	
ne	㋦ 祢	ね 祢	祢	年		

TABLE I.

na	㋇ 奈	な 奈	奈	奈	那	那
ra	㋺ 良	ら 良	良	羅		
mu	㋑ 牟	む 武	無			
u	㋒ 宇	う 于	宇	宇		
i(yi)	㋰ 韋	ゐ 為	井			
no	㋃ 乃	の 乃	乃	農	能	能
o	㋔ 於	お 於	於	於		
ku	㋗ 久	く 久	久	具		
ya	㋨ 也	や 也	也	也	屋	
ma	㋡ 万	ま 末	万	万	満	

TABLE I.

ke	㋝ 介	け 計	化	氣	希	
fu	㋜ 不	ふ 不	婦	布		
ko	㋞ 已	こ 已	古	故	許	
ye	㋱ 延	え 衣	盈	要		
te	㋓ 天	て 天	天	亭	豆	
a	㋐ 阿	あ 安	阿			
sa	㋚ 散	さ 左	佐	散	左	
ki	㋖ 幾	き 幾	幾	起	支	支
yu	㋸ 勇	ゆ 由	由	由	遊	
me	㋣ 女	め 女	免			

TABLE I.

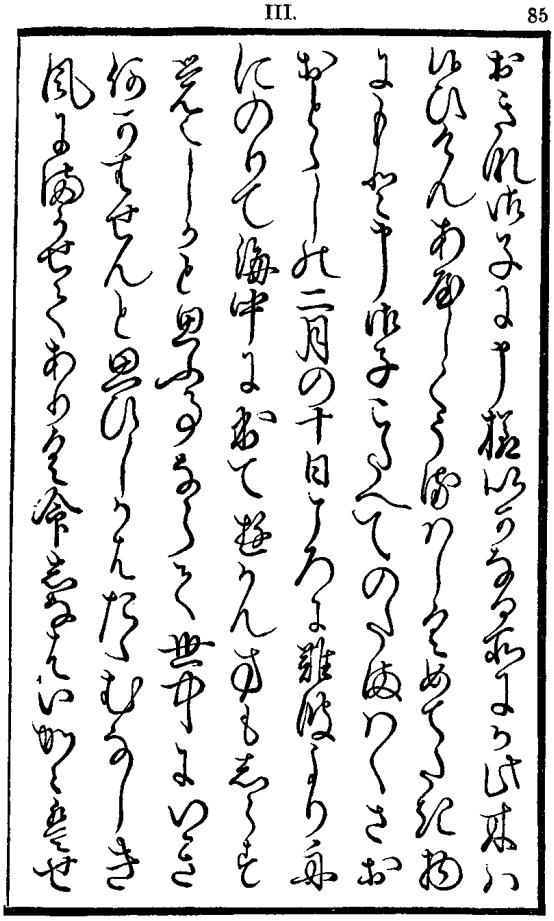
mi	ミ 美	み 美	美 美	身 身	三 三	
shi	シ 之	し 之	し 之	志 志		
ye	エ 瑟	え 恵	え 恵	徴 徴		
hi	ヒ 比	ひ 比	飛 飛	飛 飛	悲 悲	
mo	モ 毛	も 毛	毛 毛	毛 毛	毛 毛	裳 裳
se	セ 世	せ 世	せ 世	勢 勢		
su	ス 須	す 寸	春 春	須 須		
n	ン 二	ん 死				

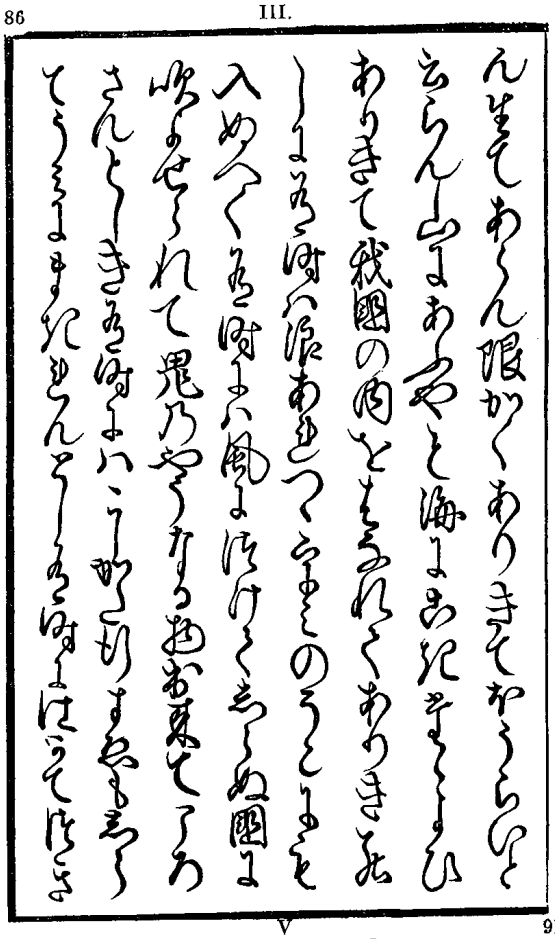
I 83

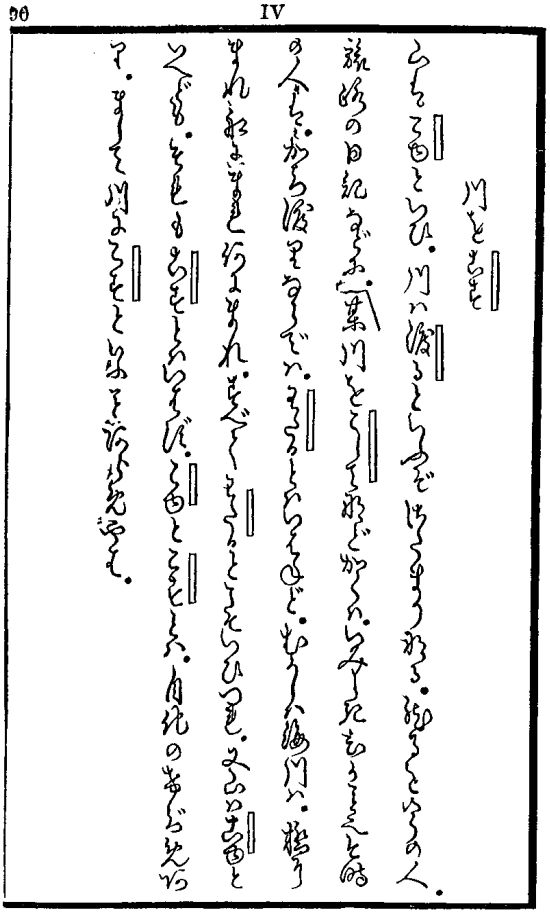
天磐座於押放天磐戸於押開
天乃八重雲於伊豆乃千別仁千別天
天降寄世奉幾

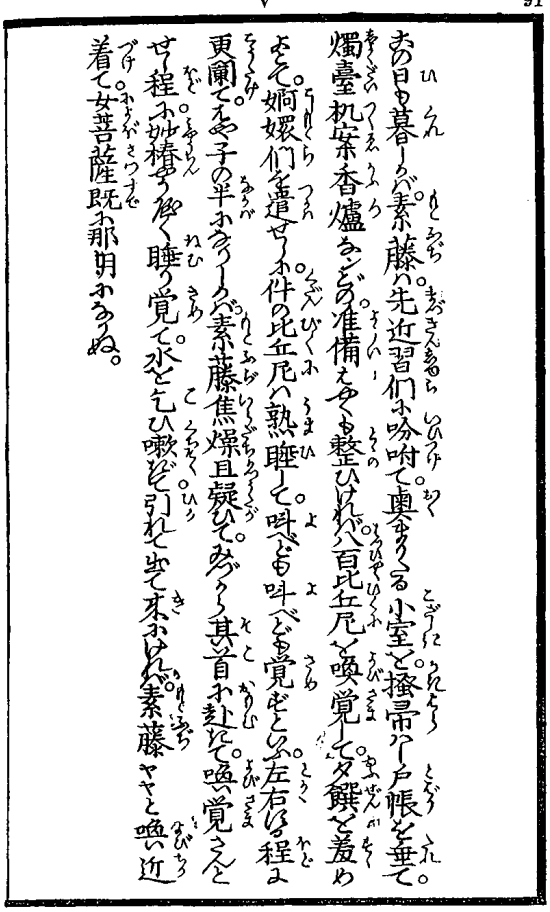
84 II

夜久毛多都。伊豆毛夜幣賀岐。
都麻碁微爾。夜幣賀岐都久流。
曾能夜幣賀岐袁。









去の日も暮しぬ。素藤は先近習の人々に吩咐して、奥まりたる小室に、掃帚、戸帳を垂て。燭臺、机案、香爐などの准備をも整ひければ、百比丘尼を喚覚して、夕饌を羞めさせ。嫋嬢の人々を遣せる件の比丘尼は熟睡して、叫べども叫べども覚めざりしが、左右に揺る程に更闌て、子の半ばに、素藤、焦燥且疑ひて、漸く其首を赴けて、喚覚さんと、程ふ妙精の眠の覚て、水を乞ひ嗽ぎ引れと出て来ければ、素藤やがて喚び近着て、女菩薩既に那男なるぬ。

92 VI.

東京ニ外國人居留スル規則附録

第一條

別紙繪圖面ニ朱線ヲ以テ示セシ場所内ハ條約濟外國人日本人ヨリ家屋ヲ借リ商買ヲ營ムタメ住居スル事ヲ得ベキ旨ヲ約諾セリ

93 VII.

以上

七月十日　松山三十郎

英國領事

94 VII.

以上